YAYOI KUSAMA

熊本市現代美術館発行
ART KISS LETTER
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto
vol.21

Sailing the Sea of Infinity

草間彌生さん初来熊！特別密着レポート

4月28日(木)の午後、展覧会オープニングに出席するため草間彌生さんが来熊しました。

熊本空港に降り立った草間さんは、自分自身がデザインした、あの展覧会ポスターで着ている黄色いドレスを身に纏い、黒の毛皮コート、黒にピンクドットの帽子を被り、体いっぱいにオーラを放ちながら、まるで、ポスターから出てきたような錯覚に陥ってしまうほどの完璧なまでの「草間彌生」として登場しました！

美術館に着き、赤いドットで埋め尽くされた外のエスカレーターから上がって来た草間さん。私たち職員が出迎えると、両手を振りこちらへ歩いてきてくれるなど、とてもおちゃめな一面をみせてくれました。

その後、会場を確認、胸に宝石がちりばめられた美しいドレスに着替え、ブルーのウィッグをつけ、記者会見・展覧会場での撮影・会見を行いましたが、多くの記者・報道陣に囲まれながら、草間さんの愛の言葉が、会場中に広がり、作品と魂が響きあう様子が感動的でした。

そしてオープニングを迎え、草間さんを待つ多くのファンや関係者の歓声と拍手の中、眩しいほどの存在感を持って会場へ現れ、美術館の空気そのものを草間ワールドに変えていきました。

次の日は、朝早くに草間さんが展覧会場へ来られ撮影が行われましたが、作品のそばに草間さんが立つだけで、また違った表情を見せてくる作品たち。1度衣装を変えて撮影を行いましたが、「ハーイ、コンニチワ！」では、さっきまで眠っていた人形たちが、衣装を替えて登場した草間さんに、ワイワイとにぎやかに話しかけているような雰囲気に包まれました。

熊本空港へ向かう帰路の車の中でも、「熊本に来てよかった」と、喜び、感謝の言葉を述べられた草間さん。過密なスケジュールの中、精力的に行動をし走り続ける草間彌生さん。そんな彼女の歴史の中に、熊本で過ごした2日間、そして展覧会が刻まれることをうれしく思いました。(R.Y)

CAMKESSのメンバーと記念撮影

SUITOTTO Kumamoto
【スイトット・クマモト】

今年度のスイトット・クマモトは、当館の展示室
GIII（ジースリー）で開催する展覧会をご紹介致します。

GIII.vol.26（2005.3.30－4.24）

宮崎昭吾展

展示風景

《04アートレード（標準）》162.1×130.3cm（2004）

「熊本市民美術展（通アートパレード）」の趣旨に賛同し、運営の支援をいただいておりますボランティア・グループ「コラボレーターの会」（平成8年発足）の会長の、画家宮崎昭吾さんの追悼展を開催いたしました。

会場内には、遺作を含めた23点とともに、小学生の孫娘さんによる宮崎さんの肖像画を展示。自宅のアトリエ内に置かれていた小品や、家族のために描かれた花の作品も展示しました。

会場内を訪れたお客様から「海のなかを漂っているみたいに、美しく神秘的」という声もありました。（H.T）

※出品作品を掲載したリーフレット（300円）を美術館受付もしくは通販にて販売しております。

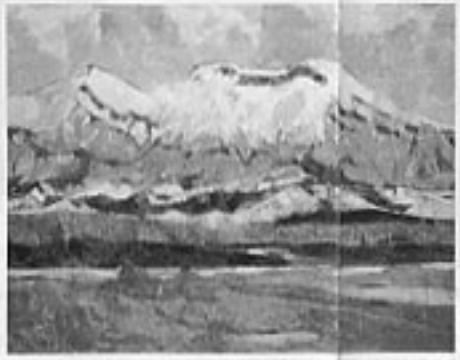
●宮崎昭吾略歴

昭和5年（1930）12月15日、熊本市に生まれる。
昭和28年（1953）3月、熊本大学教育学部美術科を第一期生として卒業。美術科教諭として、熊本市立西山中学校を皮切りに、教育の現場で活躍。
昭和32－34年（1957－59）、モダンアート展に出品、3回入選。
昭和40年（1965）、熊本県美術協会会員となる。
昭和40－42年（1965－67）、新象作家協会展に出品、3回入選し、準会員となる。
平成3年（1991）城南中学校美術科教諭を定年退職。
平成2年（1990）、第43回全国造形教育研究熊本大会事務局長として尽力。
平成2年（1990）、美術文化会員となる。
平成2－5年（1990－93）、熊本県美術協会会長に就任。
平成8年（1996）、コラボレーターの会を発足。会長として尽力。
平成16年（2004）、「宮崎昭吾追悼展」（熊本県立美術館分館）を開催。
平成17年（2005）1月23日、逝去。

GIII.vol.27（2005.4.27－5.29）

田代順七展

展示風景



《何鉢》112.1×145.5cm（1981）

戦後の熊本にあって、具象絵画の可能性を追求し続けた、田代順七氏の絵画展を開催いたしました。

2003年に熊本市に購入・寄贈された作品の中から初期の風景画や、70歳以降に精力的に描かれた同前の作品など14点を展示。

銀光会のリーダーとして熊本の美術界を牽引していた田代氏を知る人も多く、作品を前に、氏を懐かしむ人々の姿が見られました。（A.T）

●田代順七略歴

明治33年（1900）、熊本県玉名市に生まれる。
昭和8年（1933）、東光賞入選。これを機に大田黒亨、松岡三直、米林潤之らと東光会支部としての銀光会を結成する。
昭和9年（1934）、帝展初入選。
昭和11年（1936）、熊本市立高等女学校（現熊本市立高等学校）教諭となる。
昭和30年（1955）、「河畔」で日展特選。
昭和43年（1968）、熊本女子短期大学（現尚絅短大）教授となる。
昭和46年（1971）、熊本県美術家連盟が結成され初代会長となる。
昭和48年（1973）、第26回熊本県近代文化功労者として顕彰される。
昭和49年（1974）、地方文化功労者として叙勲（勲五等双光旭日章）。
昭和55年（1980）、熊本県文化懇話会から第8回芸術功労者として表彰される。
昭和60年（1985）、「田代順七展」開催（熊本県立美術館）。同展覧会中に逝去。

編　集　後　記

開館３年目を迎え、「アートキッスレター」（ＡＫＬ）も衣替えをいたしました。市民の皆様の幅広い芸術活動のレポートを中心に、熊本市現代美術館からの、さまざまなアート情報を満載した、現在開催中の「草間彌生展」にも負けない、元気いっぱいのニュースレターです。どうぞ、これからもよろしくお願いいたします。

編集長　南嶽宏

執筆者一覧
＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昭山　Syozan Kaneshiro（書道家）
森山淡草　Tanso Moriyama（書道家）

本田代志子　Yoshiko Honda（熊本市現代美術館学芸員）
薗座江美　Emi Zoza（熊本市現代美術館学芸員）
金澤麟　Kodama Kanazawa（熊本市現代美術館学芸員）
冨澤治子　Haruko Tomisawa（熊本市現代美術館学芸員）
山室りさ　Risa Yamamuro（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
竹田茜　Akane Takeda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
伊豆菜々　Nana Izu（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
園田聖美　Satomi Sonoda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）

●お知らせ
　さる4月22日（金）午前10時ごろ、熊本市現代美術館独自のサーバーが不正アクセスを受け、ホームページが改ざんされました。復旧までのあいだご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申上げます。

MUSEUM INFORMATION

草間彌生－無限の大海をいく時
2005年4月29日(金・祝)－7月3日(日)

1960年代より国際的な美術界の第一線で活躍を続ける草間彌生。無限の網をテーマにした初期の絵画、布製の突起物で家具やボートの表面を覆ったソフト・スカルプチュア、また近年のミラーを用いた作品など、常に自らの心の中に沸きあがるヴィジョンをもって、新しい表現を切り開いてきた草間彌生の作品を紹介しています。

開館時間：午前10時－午後8時（展覧会入場は7時30分まで）
休館日：火曜日（ただし5月3日（火・祝）は開館）
観覧料：一般1,000（800）円、高校・大学生500（400）円、市外小・中学生300（200）円、熊本市内小・中学生　無料、（　）は前売および20名以上の団体料金

展示風景

子どもの日記念公演
「王子様の耳はろばの耳」

5月4日（水）、5日（木）の両日、子どもの日記念公演として、人形芝居かすべるによる「王子様の耳はろばの耳」が上演されました。人形芝居かすべるの新作は、人形だけが物語を演じる人形劇とは一味違う、演者と人形が物語を織るミュージカル仕立てになっていて歌も楽しめる内容になっていました。人形だけが演じる人形劇では、セットの中の人形と観客の間にどうしても消せない境界線のようなものが感じられていたのですが、今回の作品では演者が人形と絡んだ瞬間に観客と人形との距離がなくなり、人形、演者、観客を含む「空間」自体がひとつのセットに変身したのには驚きました。これが人形劇のもつ魅力のひとつなのだな、と実感した公演となりました。（E.Z）

熊本市現代美術館アートブック第1弾
福島次郎
最新書き下ろし少女小説『花ものがたり』発刊！

AKL第4号のインタビュー「SUITOTTO＊KUMAMOTO」で、幼少期に抱いていた将来の夢を「小説家」「園芸家」「挿絵画家」と語ってくださった福島次郎さんの、最新書き下ろし少女小説『花ものがたり』を発刊いたしました。12種の花を主題に綴られた、軽やかに揺れる乙女心を存分に描ききった短編集です。ピエロが花と戯れる様子を描いた愛らしい挿絵もすべて福島次郎さんによるものです。福島次郎さんの織り成す、清らかな乙女の世界を、ご堪能下さい。

なんと、あの高視聴率ドラマ「牡丹と薔薇」の脚本家中島丈博氏の賛文が、帯に入っています！（定価2000円、熊本市現代美術館、市内主要書店にて販売しております）

「母の日」スペシャル－お母さんのしていたスカーフ、覚えていますか？

2005年5月8日（日）「母の日」、当館キッズ・ファクトリーに於いてCAMKアート・カレッジを開催しました。ワーク・ショップの内容は、世界にひとつしかない、素敵なスカーフを作ってみよう！というもの。参加したのは幼稚園の年中さんから小学校6年生までの11人でした。約2時間かけて、さまざまなスカーフを作りました。

はじめに、子どもたちに誰にプレゼントしたいのか、プレゼントする人はどんな存在の人なのか、そして、その人が似合いそうな色は何色なのかを書いてもらいました。そして、大切な人に贈り物をするという想いを込めて、それぞれ制作を始めました。

今回使用した染色の道具は、伝統的な日本の色ばかりを集めたものでした。茜（あかね）色、瑠璃（るり）色、浅葱（あさぎ）色、山吹色、江戸紫、海老色、金茶（きんちゃ）、柿色など昔段、絵の具箱には入っていない色たちを相手にみんな一色一色確かめながら、色を感じながら染めていきました。

大きな筆で大胆に色をおいていく子、下書きを繰り返しながら描きたいものを考える子、たくさんの色を使って反復した模様を描く子、絵を描くように筆を走らせる子、時には、思いがけない滲（にじ）みがとても良い色彩に変化したり、絵の具が乾くことによって、素晴らしい光沢が生み出され驚いたり、画用紙に描くことでは味わえない染色ならではの感動をそれぞれに感じ取りました。

最後に、それぞれスカーフを贈りたい相手にお手紙を書いて、世界にたったひとつしかない出来たてホヤホヤのスカーフと記念撮影をしました。子どもたちの「楽しかった！」という言葉とお母さんたちの嬉しそうな笑顔とともに、CAMKアート・カレッジ講座は終了しました。（N.I）

2005.4.1 - 2005.5.31

作家のリンダ・ルロイさんと真木緑さん

「リンダ・ルロイと真木緑「New Haiku Paintings」」

2005.4.8－4.19　島田美術館ギャラリー

熊本市手取本町6・1 TEL356-2111

「私にとって絵を描くことは、しなやかに生きていく上でのひとつの道具だと思っています。」と話す真木緑さん、そして今回初めて日本を訪れたというイギリスで多彩な活動を繰り広げるリンダ・ルロイさん等による俳句を題材としたじつに個性的な2人の作品展が実現した。実に雄々しい筆のタッチで刻み込まれるような一句、一句であったり、今回初の試みだという黒のみで描かれたモノトーンのリンダさんの作品に対して、真木さんは自ら長年俳句の作り手でもあって、句の内容・含みをしっかりと噛みしめ、詩み手の心象風景をも映し出すかのような表現が繊細になされていた。また今回2人とも三次元の作品を制作している。紙を数枚重ねて上から焼やしたもので下の紙が焼え落ちた箇所から見える構造になっている。表面の焦げが浮き上がっている状態で色彩をより鮮やかに際立たせているかのようだった。

今回が2人の初めての共作であり、真木さんからの提案だったという。かねてから文字を再に捨す方法で描いていたリンダさんは"俳句"という日本の伝統的な題材にとても興味を覚えたという。制作の過程としては、まず真木さんが俳句を訳しそれをイギリスのリンダさんへ送り、それぞれの感性や解釈で描いていったのだという。「それぞれが持ち寄って並べて展示した際には新鮮な驚きと共にお互いに新たな発見があった。またこれまでの独自の作品制作とは違った'俳句'を通しての作業は実に今後の活動にも影響を与えうる出来事だった。」と語るお2人。

それぞれに個性的な2人がありふれたものではなく、新しい試みをしてみたかったと'俳句(Haiku)'をある種の衝撃として地球の真反対であるそれぞれの空間で創り出していたという時間にロマンをはせ、2人の偶然のテレパシーが生み出した作品から受ける印象はとても神秘的でもあり、叙情的な空間を感じ取れる貴重な体験であった。今回、新に見出した発見が2人の活動にどういった展開をもたらしてゆくのか、今後おおいに期待される。(S.S)

「兼崎ちあき油彩展」

2005.4.9－4.15　画廊喫茶三点鍾

熊本市手取本町3・8有明ビル TEL326-3040

兼崎ちあきさんの個展。こってりと絵の具を盛上げた重厚なマチエールに、色彩豊かな花々が表現されていた。バラやポピー、コスモスなど、はなやかな色合いのものを選びながらも、上品で落ち着いた画面に構成してあり、西風としても、花弁一枚の表現にこだわるよりも、花を単品でどっさり押したときのような、花のそのままの魅力を活かした雰囲気が作品にあった。

今回が初個展とはいえ、17年間、絵を描き続けてきた兼崎さん。今回は、花というモチーフに絞り込んでの作品展にしたということだが、小品を中心に様々な種類・色合いの花を描くことで、長年の鍛錬のうちに確立された作家の魅力が十分に感じられる展示になっていた。

「作品を制作する時は、それぞれの花の持つよさを引き出せるように、花を選ぶときも見たときに強く心を引いたものを描きました。初個展ということに対し、頭をくくったというか、覚悟を決めて行いました(笑)。いざ作品が会場に展示されてみると、とても照れくさく感じるし、まだまだ勉強して極めていきたいなと感じています。」と語る兼崎さん。

そして最後に、「お花を描く時に、画面に躍動感というものが表現できたら、と考えています。人が生きている喜び、そういう躍動する喜びを込めて作品を制作しています。」との言葉。

古今東西の作家が魅せられ続ける「花」、そういうそのままで美しいモチーフに、いかに作家性を映し出すかは、アーティストの度量が問われるところだが、今回の展示ですでに、兼崎さん独自の魅力が作品から感じられた。兼崎さんのテーマ「躍動感」が、今後、更に展開していくことが楽しみである。(H.T)

出展作家

花芸安達流　内山恵美瞳展「萌木立つ」

2005.4.23－4.29　扇田美術館ギャラリー

熊本市扇崎4・5・28 TEL352-4597

「新緑の時期の今の自然界には負けるかもしれないけれど、取り入れるだけではなく、生かして頂戴という花の気持ちと自分の気持ちを活けました。」と語る花芸安達流の代表、内山恵美瞳さんの生け花展。花蒲鉾の凛とした風情と、デッセンの基のしなやかな動き、それぞれの凛い梨の花がアクセントになった出迎えの花に始まり、和紙作家の柴田恒雄さんに作ってもらったという、和紙を使った靴やシャツのユニークな花器のコーナーは、新一年生をイメージしたという。ガーベラやカスミソウが元気よく活けられ、「親子で来られた方にも楽しんでもらいたいと思ったんです。」という気持ちが随所に表れていた。「すがすがしさを表したかった」という真竹を使った大作は、濡れたような真竹の緑とニシキギの新芽に、スモークツリーや薄いグリーンのカーネション、アクセントにブルーのデルフニュウムがあしらわれ、押さえた中にも草木の萌え出る力強さを表現。「もうちょっと花を増やしたほうがいいかな、などと迷うときには逆に減らすようにしているんです」という言葉から、余計なものを削ぎ落として初めて、自然界の美しさに対峙できるのではないかと感じさせられた。

「萌黄＝萌木のイメージなんです。」と内山さんが語るように、大作の中に散りばめられた黄金ひばの葉先の萌黄色がとても印象的だった。(E.Z)

「Tell me more!!#45 桃太郎 a go go!!～ なつかしのマンガ映画セレクション初物編～」

2005.5.13　イクイップメントフロア

初期国産アニメの中では出色の出来と言われている「桃太郎の海鷲」が見られると聞いて足を運んだ。69'nersFILMによるこのイベントは、映像をセレクト、熊本では南坪井にあるカフェ「イクイップメントフロア」ではほぼ毎月一回上映しているもの。移動式映画館の現代版を目したというこの企画、ちょっと普段は見ないような作品を楽しめて、思わず映画を見に行く楽しさを味わえる。さて今回の作品は「桃太郎」以外にも5作の短編を上映、いずれも柔らかな動きが美しく、「日本のアニメは戦後に始まった」という迷信をきれいに吹き飛ばしてくれた。(K.K)

中川恭子さんの作品

「ジェイ企画」展

2005.5.11－5.20　画廊喫茶ジェイ

熊本市大江本町6・9(妹殖天神電停前) TEL372-8732

画廊喫茶ジェイの「ジェイ企画」展、今回の企画展のテーマは「ジェイを描く」というもの。ジェイのご主人が数年前に、熊本在住の画家たちに描いてもらった「ジェイ」ばかりを集めた作品展。すべて異なる画家たちが描いた、それぞれの「ジェイ」11点が店内の柱や壁に溶け込むように展示されていた。11点の作品は、オーナーが購入したものや寄贈されたものだそうだ。どれも「ジェイ」への想いが込められた素敵な作品ばかりだった。

まず、店内に入ると、入り口を真横から見たもので「ジェイ」の壁の張り紙から公衆電話、床に置かれた花々やレトロな雰囲気をもったランプと事細かに店内を描いた作品に出会った。その他には、「ジェイ」を抽象的に色で表現した作品。版画の中に「ジェイ」へのメッセージを込めた作品。スケッチ風に「ジェイ」の外観を描いた作品。外観を描いた作品には、妹殖天神の電停越しにジェイを見たものや、道路を行き交う人々までを生き生きと描いた作品もあった。どの作品も同じ「ジェイ」を描いたものではあるが、それぞれに味わい深い画廊喫茶「ジェイ」というものが滲れていて、絵本の中の一場面のように、見ているだけでワクワクしてくるような雰囲気を持った「ジェイ」や大人の香り漂うレトロな「ジェイ」、熊本の風景の一部として切り取られた「ジェイ」、コーヒーの香りが今にも届きそうな、あたたかな「ジェイ」とひとつひとつにストーリーを含んだものばかりであった。どの作品にも「ジェイ」を彷彿とさせるランプや花、優しい木の温もり、煉瓦、暖炉、ツタ等が描かれており、レトロな雰囲気が残る、今も変わらない「ジェイ」をそのままの姿で伝えていた。(N.I)

会場風景上、森川博子さんの作品(部屋へのディテイル)。

「ヒロパッチワークサークル第5回キルト作品展」

2005.4.13－4.18　アートスペース大宝堂

熊本市上通5・6 TEL354-2155

森川博子さん主宰の教室、ヒロパッチワークサークルによる五回目の展覧会。27人が力作を発表した。すべて手縫いで作られるキルト作品は、一つ仕上げるのに1年かかるという。「今回は作業が遅れた方が何人かいらして、みんなで手伝いました。でも複数の人で一緒に縫うのは、キルト制作の伝統的な作り方なんです。たいへんだったけれど、とても楽しかったですよ」と主宰の森川さん。針の一目一目に、手作りの楽しさがのぞく、すてきな展覧会だった。(K.K)

「平方研水・書と篆刻展」

2005.4.24－4.30　画廊喫茶三点鍾

熊本市手取本町3・8有明ビル TEL326-3040

書家の平方研水さんは篆刻が専門であるが、今回は、篆書と隷書に篆刻を配した小品18点を額装で展示した。

「祈誓(神仏に祈り誓う)」は篆書に篆刻印影をうまく配置していた。

「天下帰心」(魏の武帝の詩)や「鬱々帰鳥」(陶淵の詩)等は篆書のみで手なれた用筆である。

「雨餘千豊暮山緑」(陸游の詩)や「獅子吼」(禅語)に「賞心楽事」は篆刻のみであるが、刀の切れ味に鋭いものが見られた。(S.K)

野田靖さんの油彩(水彩)

「三人展」

2005.5.11－5.20　画廊喫茶「南風堂」

熊本市北千反畑町5・13宅建ビル1F　TEL343-9664

日田セイ子さん、坂本悟さん、野田靖さんの三人展。店内には全部で15点の作品が展示してあり、昨年制作した作品を発表する形で主に秋・冬の風景が中心に描かれていた。

坂本さんは水彩画で、やわらかでぬくもりを感じさせる色使いがゆったりとした時間を演出しているかのよう。日田さんと野田さんは油彩画で、日田さんの作品はきりりとした寒さを感じさせる木立の風景が細緻で、5月という今の季節を忘れさせるほど凛とした雰囲気を作っていました。野田さんは《湖畔》のシリーズが3点と山の風景などの作品が素朴なタッチで描かれ、キャンバスの中の澄んだ青空が印象的でした。

みなさん80歳を超えているそうで、楽しみとして長く絵を描かれており、毎年この時期に三人展を開催しているということだ。(A.T)

「第18回書道紅華会書作展」

2005.4.26－5.1　県立美術館分館ギャラリー

熊本市千葉城町2・18 TEL351-8411

熊本市在住の仮名作家・田中小華氏が主宰する紅華会が、年に1回の作品発表会として続けてきたレベルの高い仮名書道展である。

指導者は、平安時代中・後期の代表的な古筆の研究を力説しているそうだが、10年以上の継続者を中心に、上代仮名様式の安定した力作が並んで、その成果は充分発揮されている。

35名の出品者に含まれている約10名の初心者も良く頑張っていると思った。なかには入会1ヶ月の新人もあるという。参加された積極性と指導者の指導力に敬意を表したい。(T.M)

「森山淡草　古稀書展」

2005.5.3－5.8　県立美術館分館ギャラリー

熊本市千葉城町2・18 TEL351-8411

森山秀吉(号・淡草)さんは、第1回を還暦書展、その5年後に熊本大学の退官記念書展、更に今回の古稀書展と3回目の個展である。作品は古代文字である甲骨文、金文等を素材にしているものや、行草書体に、生活の中の書として、陶書、看板、のぼり等約50点を展示した。集契文書雑振玉句を甲骨文で銀箔紙(6x4尺)に墨で書いていた。王羲之の蘭亭叙の一説を楚の帛書(はくしょ)を素材にして二曲屏風に現代的な感覚で見せていた。「喜・悦・愉・歓」に「喜び上手には嬉しい事がついて来る」と添え書きがありわかりやすい作品になっているのも特徴である。

天草・高浜焼の白磁の大皿に「愛」「楽道」「尽楽」など甲骨文字で造形的な面白さが楽しい作品となっていた。(S.K)

「第45回白鵬書道会展、白鵬三人展」

2005.5.24－5.29　県立美術館分館

熊本市千葉城町2・18 TEL351-8411

熊本市在住の仮名書家・中村天書会長が率いる白鵬書道会の303名が参加する大発表会である。夫君の前会長中村龍石氏とともに約40数年に亘って育て上げられた白鵬会の作品展は、出品数も多いが、年期の入った会員数も群を抜いているので、さすがにレベルの高い作品が多いという印象であった。もちろん新人も含まれているようであるが、古筆の臨書も含めて良く指導が行き届いていると思った。

第3室のメイン、中村会長の扇面屏はさすがに目を惹(ひ)いた。それに第1室の、副会長田内研水さん、那須球石さん、浦田瑛雪さんによる「白鵬三人展」は、永年会を支えてきた重鎮の選抜展だけあって、三人三様見応えのある練熟作揃いと敬服した。(T.M)

作家の野原れい子さん

「宇土半島「和」の職人展」

2005.5.10－5.15　熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3・35 TEL324-4930

宇土半島に在住する「和」の職人、宇土市の10工房(蓋土窯の前田和さん、糸さん、文窯の泉水博文さん、八八窯の田中厚子さん、宇土張り子の坂本紀美子さん、沼田馬鐙鉄の沼田孝一さん、小山手打ち刀物の小山博行さん、規工房の小野寺友吉さん、型染の野原れい子さん、能面の荒木強さん、石井楽器店の石井政弘さん)、宇城市三角町3工房(山舟窯の山根美二さん、漆土窯の安井建二さん、中島竹細工店の中島司さん)、不知火町の2工房(デコイ工房の釣崎清隆さん、昭口太鼓店の昭口勇さん)の方々の作品展。期間中終日実演があり、来場者と言葉を交わす和やかな雰囲気に包まれていた。

今回は型染をなさっている野原れい子さんにお話を伺った。熊本市出身の野原さんは、澄んだ水と田を求めて、宇土に移り住んで5年になる。以前は、沖縄の染色である「びんがた」による振り袖等の制作を、京都で行っていた。当時との大きな変化は、自然と自分の距離だという。京都では、作品のモチーフを、書籍や美術品から得た文様を素材にしていたが、宇土では、田を耕し、身体に感じる風や匂い、そのありようの確かさを、実体験による感情をもって表現に取り込むようになったという。《ビービー豆のコースター》は新緑の清々しさを思いださせる透明感のある黄緑が印象的で、《水色のうたをうたおう》では、軽やかな水色の地に描らぐ五線譜、おたまじゃくし、蛙、カタツムリ、どくだみ草が描かれ、日常の温かなまなざしが、静かな調和を保った作品であった。(Y.H)

作家の味府礼子さん

「味府礼子　作陶展」

2005.4.12－4.17　熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3・35 TEL324-4930

4月12日から始まった「味府礼子　作陶展」は、大きな窓から新緑に包まれた熊本城が見える伝統工芸館の2階の会場で開催された。

現在、独立をして7年が経ち、今も常に器としての美しさ、清潔感を追求し、健康的な器作りを意識していると、力強くお話してくださった味府礼子さん。その言葉ひとつひとつに、細やかな思遣いを感じ、その想いが指から土へと伝わり、美しくて凛とした"器"を作り上げていると感じた。

また、作家中村之隆さんの舟の形をした竹のオブジェも部屋全体を航海へといざなう演出が施され、生活のための器でありながら、手に取った私たちを海の向こう、または宇宙へと運れて行く。

柔らかくもあり強い光を放つ器に、陶器の奥深さを教えてもらった。(R.Y)

ART de GYAN!

[アート・ド・ギャン]

熊本弁で「アート、どうぞ!」の意です。